

# 和船の操船と身体技法

## Physical movement to row the oar of the traditional wooden boat

昆政明 \*1

Masaaki KON

### 1. はじめに

本報告は、伝統的木造船—和船—における推進具の操作法について、身体の動きに視点をおいて検討するのが目的である。機械化以前の推進具は帆、櫓、櫂、竿に大別されるが、ここでは主に漁船で使用された櫓、櫂を中心に報告する。対象とするのは、主に東北地方北部から北海道にかけての北日本海域である。

### 2. 推進具としての櫓・櫂の操作

櫓は操作するとき手で保持する取手の部分と、水中に入って推進力を生む水切りの部分からなる。操作する者が船の進行方向に対して横向きに立ち、両手で櫓を扱う。櫓は櫂と違い、水を掻くのではなく、水中で櫓の先端部を左右に動かすことで揚力を発生させ、推進力とする。櫓の操作は、腕だけで行うものではなく、腕の動きと腰、膝の動きのバランスによって、推進力と持続性を得ることができる。水切りと取手の扱い方によって、進路を左右に自在に変更できるが、後進することはできない。また、立って操作するため、風の強い時や波の高い時には、操船が困難となる場合がある。

櫓は装着する箇所によって名称が異なる。船尾（艫）に装着し、舵の役割も受け持つ艫櫓（トモロ）、舷側に装着し、主に推進を受け持つ脇櫓（ワキロ）がある。艫櫓は脇櫓より大型の櫓で、漁船では主に船頭が操作する。

櫓の構造名は地域によって様々であるが、北日本海域での名称によっておおまかな構造を述べると、櫓は水を切る部分のハサキとロゼの部分に分かれ、麻糸のツギテで個縛されている。ハサキの下部には船体に取り付けられた支点（ロズク）を差し込むロザラが装着されている。櫓を安定させるための綱（ハヤオ）が船体から伸びており、これを絡めるツクがロゼの先端部分にある。（図1）

櫂は、水切りの部分と直角に交わる取手の部分からなる。一般的には、早櫂（サツカイ）と艫櫂（トモガイ）に分けられる。これらは艫櫓と脇櫓の関係に似ている。早櫂は進行方



図2 早櫂の操作と櫓の支点



図1 櫓の操作と各部名称



図3 早櫂の操作

向に背を向け座って操作し、両舷に分かれて一人が両手で漕ぎ、船を進める役割を担う。艫櫂は艫櫂と同様、立って操作し進路を定める舵の役割を果たす。(図2) これらの櫂はカイジリという差し込む輪部分を支点として操作するもので、オール (Aar) に相当するものである。これとは別に、両手で保持し手の力だけで漕ぐ櫂をパドル (Paddle) として別に分類するが、今回の対象地域内での使用事例は見当たらない。

早櫂と艫櫂の組み合わせは、やや大型の船に多く見られる。小型船の場合、早櫂より大型の櫂を用い、立って操作する櫂がある。これは立って操作することから立櫂 (タチガイ) といい、水中部分を8の字に練ることから練櫂 (ネリガイ) とも呼ばれる。漕ぎ方により前進後進、左右転換が可能で、特に漁場での操船、出入港時の操船に適している。(図3)

車櫂 (クルマガイ) は北日本海域特有の推進具で、タカマという支点に櫂を差し込み進行方向に背を向けて座り、両手で左右舷の櫂を漕ぐ。漕ぐとき胸元で両手を廻すように漕ぐことからこの名がある。車櫂は、艫と比較して風にあおられることなく操作することが出来るので、風の強い時でも使用することが出来る。(図4)

### 3. 漁場における操船具としての艫・櫂の操作

主として海岸近くの磯場を漁場として行なう漁を磯漁という。磯漁は木造の小型漁船に一人ないし二人が乗り組んで漁を行う。艫を使用する場合は2人以上の乗組員が必要であるが、櫂の場合は一人での操業が可能である。一般的に、漁場への行き帰りは艫、櫂を使用し、帆も使用する。ここでは、漁場における艫、櫂の使用について事例をあげて紹介する。

コンブ漁は通常3人で操業した。漁場までは一人が船尾で艫、二人が船首にいて早櫂を漕いだ。艫と車櫂を使用することもあった。漁場では一人が操船係 (トモドリ、トマイトという) となって立って櫂を扱い、二人がコンブをとった。箱メガネで海中を覗き昆布の位置を確認して船の動きを指示し、海中に採取具を入れて昆布をねじり取った。指示に合わ



図4 車櫂の操作



図5 足で車櫂を操作する

せてトモドリが櫂を操作して船を移動した。この時の櫂は立って作業する練櫂の動かし方である。昆布を採取具に絡みつかせると同時に、練櫂で船を動かし、その動きと合わせて海底から昆布をねじり取るので、息が合わないとうまくいかなかった。

アワビやウニなどの採取では、小型船に一人で乗り組み作業した。練櫂を使用するときには、通常船尾の左舷側に座り、舷側から身乗り出し、箱メガネで海中を覗き、片手で練櫂を操作した。この時の櫂の操作は上半身のみの動きとなった。車櫂を使用し、一人で操業するときには、足で車櫂の一方を操作するという、熟練を要する技術が用いられた。この場合は船首の右舷側の胡坐をかき、舷側から身乗り出し、口で箱メガネをくわえ、左手で左舷のクルマガイ、右足で右舷のクルマガイを操作して船を移動しながら海中を覗き、獲物をとる時には両手でホコを使った。(図5)

しかし、近年では二人乗りで漁をする事が多く、漁場までは二人で車櫂を漕ぎ、漁場に着いてからは、一人が船首の車櫂を操作し、もう一人が船尾の左舷で作業する。これをトマイト、またはトモドリという。

### 4. まとめ

船上作業における操船具の種類と操作法について報告した。船は水上の移動手段であり、漁撈時には漁具と一体化し漁師の身体の一部として機能する。操船具の機能と身体の動きの関係について、漁師の技量による使用方法の類型についてその一端を紹介した。

\*1 神奈川大学大学院歴史民俗資料研究科

《連絡先》 昆政明

〒221-8686

横浜市神奈川区六角橋3-27-1

電話：045-481-5661 (代表) FAX：045-413-4151

E-mail:kon@kanagawa-u.ac.jp